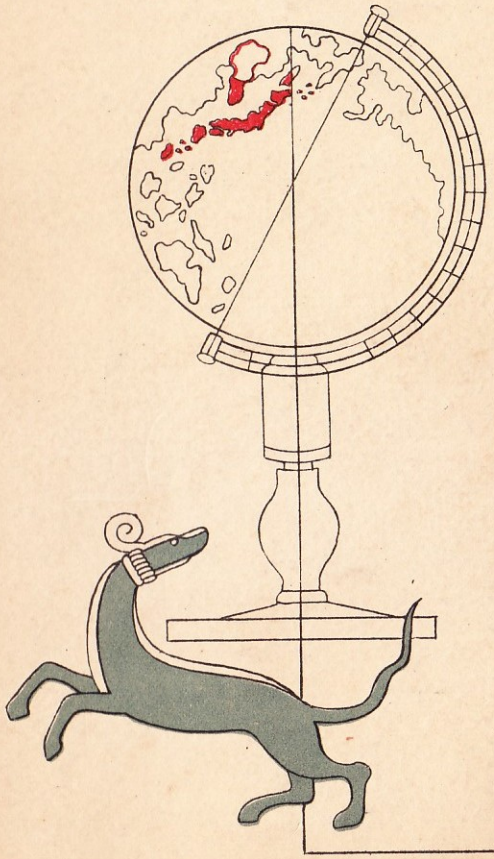
die impersonalien bücher

Bd.19

非人稱命題叢書



雪線に描く　吉村比呂詩

裝幀　古賀春江

發行所　日本・川崎　詩之家

die impersonalien bücher

I	餘技	竹中久七
II	花心	佐藤惣之助
III	觀念映畫	藤田三郎
IIII	春秋	高橋玄一郎
V	夜へ續く挿話	高木眞弓
VI	自畫像	水町百窓
VII	西史	清水房之亟
VIII	日月	杉浦杜夫
IX	紅鳩	平埜甲策
X	愛の作圖題	能美千秋
XI	白い人形	吉村比呂詩
XII	燕書	佐藤惣之助
XIII	芽柳	古川賢一郎
XIIII	失墜虚報	近藤壬子男
XV	離反	横山貞治
XVI	觀月	加藤五郎作
XVII	しんでれら	方等みゆき
XVIII	植物の榮光	近藤武
XIX	雪線に描く	吉村比呂詩

以下續刊

非人稱命題叢書

送料各冊貳錢
定價各冊參拾錢

昭和十年六月十日印刷
昭和十年六月十日發行
大野郡清水村
牧ヶ洞著者吉村比呂詩
岐阜縣
所村比呂詩發行
神奈川縣
崎ノ川市砂子一
二六詩之家編
輯部發賣所東京市神田區通
神保町一上田
屋書店

第二詩集

雪線に描く

吉村比呂詩

一九三五年六月詩之家刊

目次

蝶の思念 …… 1
夢の寢覺 …… 2
春の日 …… 3
若葉の光彩 …… 4
距離と誘惑 …… 5
春を待つ心 …… 6
婚禮の夜 …… 7
麗春帖抄 …… 8 9
想像 …… 10
月夜の感覺 …… 11
理 …… 12
A・Bの感傷 …… 13
曲馬團見物 …… 14
きりの花 …… 15
聖夜曲 …… 16 17
コスモスの花 …… 18
心よき微風 …… 19
哲理の秋 …… 20
ATOGAKI（或は言葉） …… 21 22

蝶の思念

午前の明るい光線は、寢呆けた瞳には强烈すぎる。

四角な部屋の空氣の中に、白い無數の花辨を咲かせて、昨夜の夢の秘密がふるえて……。

銀製の小さい點火器で、私はバットに火をつける。

靜かな紫煙の輪に沿ふて、あゝ、幾つもいくつも臆病な、白蝶の思念が繰り返へされる。

夢の寢覺

おびたゞしい、綺麗な明るい微粒子達が、邊りにいつぱい、きらめいて居た。

そして、たのしい傳說が、靜かに發生しかけてゐた。

あらゆる優しい感情が、私の周圍を光線で埋めて、何かしきりに私語いてゐたが……。

私は、私の幸福を、はつきり覺えてゐないのである。

春の日

幼青いヴエールに包まれながら、少女のやうにはにかむ草の芽。

白光の粒子を受け止めては、可憐な花精らを育む淺綠……。

（即ち無數の光線と、新鮮な葉綠素の芳香とで、構成されて行く季節。）

微風は氣溫でいつぱいである。水蒸氣は多量に飽和してゐる。

延びのびした大地の上に、私も頭をもたげやう……。

青空は無限に麗かである。白雲は明るく帶電してゐる。

若葉の光彩

【1】
季節が白いリボンを裝飾ける。
反對に、青空は大きな銀製の花籠を差上げる。

【2】
日光が、明るい氣溫の內部を埋めて、植物の瞳を綺麗にする。

【3】
お前の乳房に花辨が匂ひ、僕の感情も純粹になる。

距離と誘惑

白い齒車の彼方に、明滅する過去よ。
忘却こそ——妖美な青い距離である。
高く碧空に匂ふ、光の花簇らよ。
未來とは——眩ゆい幻想の誘惑だ。

春を待つ心

春を待つ心は明るい。花々の莟の光でいつぱいだ。

春を待つ心の枝には、青い小鳥が巣をかけてゐる。

（白い雪の匂ひもいゝねえ）

一人で町を歩いてゐても、炬燵にあたつて、蜜柑の皮をむいてゐても……。

ほのぼのと、子指の先から、足の裏から、たのしいものがあふれてくるよ。

婚禮の夜

雪の夜路の花嫁姿は、天上よりの人形であつた。

提灯の火は風にゆらめき、密雲より舞ひくる粉雪を、花蘂よりも匂やかにした。

僕は古風な感激に、内部を薔薇の花光で埋めた。

麗春帖抄

【1】

妻よ、日本の若き女よ。

嬉しとて泣き、哀しとてなく、涙にもろき日本の女よ。

妻よ、再び雪ふり出でぬ。

【2】

南天の實のつぶらなる、眞紅き冬の光澤を見ずや。

ねむれる妻よ。

如何なる夢を結びてあるや。そのかみの日の戀しかるらむ。

【3】

〃女の子ほし〃と妻は言へり。

〃男の子ほし〃と我は言へり。

庭の垣根の夕顔の花、ほのかに白く匂へる宵なり。

やゝありて、我はまた言へり。

〃いづれにてもよし、可愛らしき子供を得たし〃と……。

妻はゝえみてうなづきぬ。

想　像

お前の口唇の内側には、麗かな白い果樹園がある。
そして眞紅な、オランダ苺も熟れてゐる。

時ごき其處へ蜜蜂が來て、美味しい果汁を盜むで行く。
天氣の良い日は、ずつと向ふの花垣の中から、小鳥の唄も聞えてくる。

小高い砂丘へ上つて行くと、靜かな青い、海洋の波光が見えさうである。
鷗も群てゐさうである。

月夜の感覺

月夜に、青き人魚を視る。

人魚の肌は、白きかな。
人魚の眸は、哀しきかな。

（人魚は、實在ならずと言ふや……）

物柔かな月光に濡れて
私は、人魚の姿をみる。

理

花は花の爲めに、忠實に咲く。

造花は如何に美麗であつても、路傍に摘むで捨つべきもの。

故に僕は、僕の爲めに眞實を書く。

A・Bの感傷

A

花は散るから美麗しいのだ。

……至純な若き日の幻想よ……。
……處女の胸の青い小鳥よ……。

雨も降るが好い。
そして、風も吹くが好い。

B

月あり。窓青白し。
……花辨散り行きぬ……。
誰をかうらまむ——幻影にてありき。

曲馬團見物

A

クラリオネットに合はせて踊る、旅の娘のダンスを見ながら、
僕はいつしか彼女たちの、身の上につて考へてゐた。

B

あの娘の行末は……？
青いライトに照らされながら、日本の舞踊をおどつた娘よ。
（パッチリした瞳の、斷髪の……。）
光る金紗の振袖姿で、ひとり靜かに踊つた娘よ。

きりの花

五月の青空、明るく晴れて、淡紫の桐の花ばな、いとも高雅に光り匂ふよ。
けがれを知らぬ、日本の娘の、うす桃色の胸の灯はゆれ、麗はしき夢のあくがれ、ほのぼのと、瑞雲にけむるよ。
まこと、美しき叡智を持てる、處女の瞳はほむべきかな。
——其の奥底に、オアシスあらむ。
——常にあふるゝ泉もあらむ。

（附記）倉田ゆかり氏著〝きりの花〟に寄せて。

聖夜曲

第一章

夜の向ふに、一點青い花光(はな)がある。

私の頭腦(あたま)は、至純に澄むで思想してゐる。

白銀色の小さい星座よ。

こゝに女はゐない方が好い。

第二章

澄むだ私の思想には、銀河の微光(ひかり)が交叉する。

頭上の青い、宇宙(うちゆう)の變化よ。

私は地球に位置してゐるが、やがては消えて行く物質だ。

第三章

月世界の青い神祕よ。

高貴に光る死美人の顏よ。

死とは——或は、靜止の幸福だ。

コスモスの花

どんなに細くやつれてゐても、
コスモスは、
コスモスの花を、綺麗に咲かせる。

尊いことだ！

コスモスは、
コスモスの花を忘れない。

心よき微風

葡萄の棚にやゝ風ありて、紫の葡萄の房は、ほのかにゆれて靜かなり。

初秋の雲、光りて純白し……。

水清き庭の池の邊、菜園につゞく小道のあたり、草むらに蟋蟀なきつゝ。

再び風は吹き出でぬ。ゆるゆるとひとり、青春き日の物を想はむ。

哲理の秋

豪華な青空の發電所。晩秋の日の輪は黄金色である。

燦然とした電波につゝまれ、返り咲きのタンポゝの花の電氣現象。

（落葉に埋れた雜本林の向側を、遠く北方へと進む、季節の寂しい葬列よ。）

崇高く泛んだ光雲の表面に、あゝ、巨大な銀の十字架がある。

ATOGAKI

《或は、言葉》

〃雪線に描く〃は私の小さい第二詩集です。本書は謹むで恩師福田夕咲、佐藤惣之助兩氏の机下に捧げたいと存じます。また一面さゝやかな私たちの結婚を記念するための花束ともしたいのです。

第一詩集〃白い人形〃以降の作品中より拾八篇を採錄いたしました。未發表のものも二三含まれて居りますが、其他は主として詩府・硝子之家・東海文藝・詩風鈴・飛驒毎日新聞へ發表したものです。私は本集をもつて私の小さい過去に於ける、一つのポイントとしたいと存じます。

私は此の頃童謡を、其れも主に作曲振付向のものを書いて居ります。私の第三詩集はきつと〻童謡集〻となつて出るでせう。兎に角いろ〳〵の意味に於て本集は私にとつて、大變になつかしい花束なのです。

尙本書を出版するに當り、佐藤惣之助師には過分の御迷惑をかけました。又福田夕咲師、飛驒毎日新聞社長上島禪逸氏音樂と舞踊の社の大野加牛氏を始め、何時も何くれとなく御力添へ下さる鹽屋道春氏の御厚志を深謝いたします。

保谷よそ吉、橋本培石兩氏の名も本書と共に永遠に忘れ得ませぬ。

葉櫻の頃、夜の窓に
蛙の聲をきゝつゝ。

著者